教授挨拶

福島県立医科大学医学部　基礎病理学講座
千葉英樹

未曽有の東日本大震災と原発事故から、二年三か月が経過いたしました。ご承知の通り福島県では、未だに警戒区域と避難指示区域が設置されており、多くの住民が生まれ育った土地や生活基盤を奪われたままの状態です。長期間の避難所生活を余儀なくされている皆様に心からお見舞い申し上げますとともに、被災地の真の復興を望んでおります。

震災後しばらくの間、本学は、重症患者（被爆患者を含む）の受け入れと入院患者への対応という病院機能維持に特化していました。ライフラインの中では断水とガソリン不足が続き、大学や県の対策本部はその管理・補給にも頭を悩ませました。また、正確な情報を入手することも困難で、本学職員および関係者、特に臨床系や事務系職員、幹部職員は激務が続きました。基礎系講座に所属する職員も順番に泊り込み、病院内外の放射線バックグラウンド測定や外来患者汚染のサーベイなど出来ることを行いました。さらに、関東淡路大震災を機に結成された、緊急被爆医療支援チーム、全国各地あるいは世界各国からの医療支援チーム、自衛隊、消防、警察、国や自治体の応援もいただきましたし、現時点でも多くの組織や国民から献身的なご支援をいただいております。県民、本学職員の一人として、感謝の気持ちで一杯です。

また本学では、事故後いち早く県民健康管理調査に着手するとともに、二つの放射線関連講座が設置されました。さらに、県民の安心・安全を長期的に見守るために、復興に向けた医療の拠点となる「ふくしま国際医療科学センター」が創設され、ハード及びソフト面で整備が進められています。したがって本学職員は、原発事故前には想像もしなかった使命をそれぞれの立場で担っているところです。

さて本講座には、新たに井村徹也講師と柏木惟人助教が加わりました。現在の講座メンバーは計２０名で、教授１名、講師２名、助教１名、助手１名、技師２名、秘書１名、大学院生４名、コース学部生７名という陣容です。さらに本年７月下旬には、コース学部生２名の新メンバーが加入する予定です。このように、着任１年目に比べて教員スタッフは充実し、大学院生や学部生が随分と増えて賑やかになってきました。

プログラムは、札幌医大方式をモデルとして、本学医学部で二年前からスタートした取り組みです。将来の基礎医学を担う人材を育成することを目的とし、大学院に準じる教育を医学部在籍時から開始するプログラムです。また、本学の基礎医学研究と教育の充実を図り、基礎医学の素養を持つ臨床医の輩出、ひいては本学全体の発展の礎を築く人材の育成を目指すものです。；

現在、プログラム前期プログラムに在籍する医学部生は２０名で、うち７名が基礎病理学講座に所属しています。また、昨年度は３名（うち２名は基礎病理学講座）が修了認定

を受けました。この中には、将来的に基礎医学研究者や病理医を目指そうという学生もかなりおり、本学のプログラムは概ね順調なスタートを切ることが出来たようです。これら将来ある学生たちがサイエンスや病理学の面白さと楽しさを実感し、研究者や病理医として、あるいは基礎の素養を持つ臨床医として巣立ってくれればと考えています。

当講座の現在の研究テーマは、①幹細胞の上皮分化誘導機構、②新規ダイレクト・リプログラミング法の創出、③血液脳関門と脳疾患、④C 型肝炎に対する新規治療法の開発、⑤難治がんに対する分子標的療法の開発、⑥神経幹細胞の増殖・分化の制御機構、⑦がんの転移メカニズムの解明です。井村徹也講師と冨川直樹講師をグループリーダーとして、講座メンバーがそれぞれの研究テーマを担っています。これらの研究テーマや様々な病気の仕組みに興味のある方は、ぜひ気軽に講座にお越し下さい。大学院生・大学院研究生・博士研究員も随時募集しております。

最後になりましたが、皆様方には末永いご支援とご協力を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

平成２５年６月２２日